

## ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか？<sup>1) 2)</sup>

### —ボランティア活動経験とパーソナリティ特性，社会的スキル， 充実感，ボランティア活動観の関連性からみた一考察—

Do Volunteer Activities Effect Psychological Growth of Participants? : An Examination on the Basis of Relations among Experience of Volunteer Activities, Personality Traits, Social Skills, Senses of Fulfillment, and Views of Activities.

水野邦夫・加藤登志郎\*

Midzuno Kunio, Kato Toshio

\*所属：株式会社ハヤシ

#### 要 約

本研究は，ボランティア活動が若年層の心理的成長にどのような効果をもたらすのかについて検討することを目的とした。アンケート調査の結果，経験あり群と経験希望群は，経験なし群よりも，社会的外向性，表出的コミュニケーション能力および充実感が有意に高く，また，ボランティア活動へのイメージについては，経験希望群は肯定的イメージや期待感が経験なし群よりも高かった。以上のことから，1) 積極性やコミュニケーション能力が高い者がボランティア活動に関心を持ちやすいと考えられること，2) 経験希望群はボランティア活動への過度に期待が大きく，十分な情報提供を行う必要があること，などが論じられた。

**Key Words**：ボランティア活動経験，社会的外向性，支配性，社会的スキル，  
充実感，ボランティア観

#### はじめに

現代社会において，ボランティア活動は主要な社会活動のひとつとなりつつある。近年のボランティア活動の高まりを示した資料を見ると，まず総務

1) 本研究は，第二著者が平成18(2006)年12月22日に聖泉大学人間学部人間心理学科に提出した平成18年度卒業論文を加筆・修正したものである。

2) 本研究の一部は，日本社会心理学会第48回大会(於 早稲田大学)においてポスター発表された。

省統計局（2003）は、平成13（2001）年10月に実施した社会生活基本調査の結果からボランティア活動の状況についてとりまとめを行っているが、それによると、1年間（平成12年10月～平成13年10月）に何らかのボランティア活動を行った人は32,634,000人に上り、10歳以上人口に占める割合（行動者率）は28.9%に及び、5年前と比較すると、行動者数は4,432,000人、行動者率では3.6ポイント上昇している。また、特に若年層（10代前半から20代前半）の比率が概ね10%程度上昇している。次に、全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター（2006）の集計によると、ボランティア活動を行う者や団体の数は平成16（2004）年で7,793,964人、123,300団体と増加の一途をたどっており、それぞれ平成元（1989）年、平成6（1994）年より倍増している（ただし、同センターの調査は各社会福祉協議会ボランティアセンターに登録、もしくは調査等で把握されている数字である）。これらのことから、ボランティア活動への関心の高さを窺い知ることができよう。

また、学生のボランティア活動についてみると、村上（2002）は中央共同募金会が平成12（2000）年10月に行った調査について報告しているが、学生のボランティア活動参加率は6.5%で、18歳以上一般の比率（10.3%）と比べると低いが、過去のボランティア活動経験者の割合は38.7%であり、全体の比率（22.9%）より際だって高いとし、その原因を学生ボランティアは地域に密着した継続的な活動よりも、短期間で単発的な活動が多いためであると考察している。ともかく、先の総務省統計局（2003）のデータと併せて考えると、形態はどうあれ、若年層のボランティアに対する関心も相当高くなっているといえよう。

ところで、近年、教育再生などの観点から、ボランティア活動を若年層に啓蒙・普及させようとする動きが活発になってきている。たとえば教育改革国民会議は、平成12（2000）年に小学生から高校生までの全員が奉仕活動を行うように求めており、また平成19（2007）年1月の教育再生会議第1次報告も高校での奉仕活動の必修化を提言している（読売新聞、2007）。さ

らに日本経済団体連合会（2007）も、ボランティア活動を積極的にカリキュラムに取り入れ、若者が社会参加しやすい環境を整える必要があると論じている。これらの主張は、ボランティア活動がとりわけ若年層の人々の心理的成長に寄与するという考えからなされたものであろう。これに関連して、高木・玉木（1995, 1996）は阪神大震災後の災害ボランティア活動に従事した学生等に調査を行ったところ、彼らは被災者に喜んでもらえることに満足し、それらを通して、自己変革や自己革新がなされたと感じており、さらにそのような経験がその後のボランティア活動への意識を高めたことを報告しているが、このことから、やはりボランティア活動は若年者の心理的成長にプラスの影響をもたらすといえるかもしれない。

しかしその一方で、ボランティア活動の教育的効果を過信することは、「ボランティア活動をすればすべてよし」といった安易な考えを生みかねないという恐れも懸念されよう。たしかに、高木・玉木（1995, 1996）はボランティア活動の参加が心理的な成長に結びついたと報告しているが、この場合のボランティア活動は多くの被災者を出した被災地で行われたものであり、心理的な成長をもたらすに足る刺激が至る所にあつたと考えられる。それゆえ、どのようなボランティア活動でも同様の効果が上がるとは言い難いであろう。また、災害ボランティア活動の場合、まさに自らの自由意思に基づいて参加した可能性は充分高く、そのような考えを持って参加するがゆえに心理的成長がもたらされたとも考えられ、ボランティア活動をしたいと思わない者に活動への従事を促しても、同様の効果が得られるかどうかは疑問の残るところであろう。

そこで本研究では、ボランティア活動を経験した者とそうでない者では、パーソナリティ（とりわけ、ボランティア活動を行っていく上で必要と思われる、リーダーシップ性や外向性）や表出的なコミュニケーション能力（社会的スキル）などの個人傾向や、日々の充実感、ボランティア観などにどのような違いがみられるかを調べるとともに、ボランティア活動に従事することが心理的成長にもたらす可能性について検討することを目的とした。

## 方 法

**被調査者** 滋賀県内の一大学で心理学の授業を受講している大学生167名（男子107名，女子60名）に対し，下記質問紙への回答を依頼した。

**質問紙** 調査にあたり，以下の尺度および質問項目からなる質問紙を作成した。なお，4）以外はいずれも5段階で回答できるようにした。また，4）については，単数または複数回答法で回答できるようにした。

- 1) **Y-G 性格検査の社会的外向性 (S) および支配性 (A) 尺度** Y-G 性格検査（辻岡，1982）はわが国で最も普及している性格検査のひとつであり，12の性格特性を測定することができる。今回はその中から社会的外向性 (S) 尺度と支配性 (A) 尺度（各10項目）を選び出した。
- 2) **社会的スキル尺度 (KiSS-18)** 菊池（1988）が Goldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein（1980）の「若者のための社会的スキル」リストにある6領域のスキルから3項目ずつを作成したものであり，計18項目からなる。
- 3) **充実感尺度（短縮版）** 大野（1984）が西平（1979）の現代青年の心情モデルをもとに，青年の充実感を信頼，自立，連帯の3側面から測定した尺度で，短縮版は20項目からなる。
- 4) **ボランティア活動経験に関する質問項目** ボランティア活動経験の有無，活動回数（ない者については，活動したいと思うか），参加したことがある（同，参加するならするであろう）ボランティア活動などについて，回答を求めるものである。なお，参加したことがある（参加するならする）活動については，複数回答を可とした上で，8つ（ただし，そのうち1つは「その他」として具体的に挙げさせた）の中から選べるようになっている（項目については，表8参照）。
- 5) **ボランティア活動のイメージに関する質問項目** 総務庁青少年対策本部（1994）の調査で用いられた項目などを参考に，ボランティア活動に対するイメージを尋ねる質問項目を設けた。計25項目からなる（表1参照）。
- 6) **ボランティアで得られることに関する質問項目** 同じく総務庁青少年対

策本部（1994）の調査で用いられた項目などを参考に、ボランティアをすることで何が得られたと思うか（活動経験がない者に対しては、ボランティアをすることで何が得られると思うか）を尋ねる質問項目を設けた。計11項目からなる（表7参照）。

**手続き** 受講生に対し、調査目的等について説明し、協力できる者は、持ち帰って質問紙を完成させ、原則として1週間後に持ってくるように指示した（なお、調査協力の同意の証として、所定の欄に自筆の署名を求めた）。

## 結 果

回答に不備のあるデータ等を除外したため、最終的には151名（男子96名、女子55名）のデータを分析に用いた。なお、これらのデータについても、欠損値がある場合は分析の都度に除外した。

**ボランティア活動経験による分類** ボランティア活動経験に関する質問項目をもとに、被調査者の活動経験を集計したところ、これまでにボランティア活動経験がある者は72名（男子43名、女子29名）であった。また、活動経験がない者について、経験はないが活動をしたい者は34名（男子21名、女子13名）、したくない者は45名（男子32名、女子13名）であった。そこで、被調査者をボランティア活動経験のある群（以後、「経験あり群」）、ボランティア活動経験はないが、活動してみたい群（以後、「経験希望群」）、活動経験もなく、活動したいとも思わない群（以後、「経験なし群」）の3群に分類した。

**従属変数の作成** 上記の群間で、パーソナリティや社会的スキルといった内的特性や充実感、ボランティア観などがどのように異なるかを検討するにあたり、従属変数を作成した。まず、社会的外向性、支配性についてはCronbachの $\alpha$ 係数の値が充分高かったので（各、 $\alpha = .86, .76$ ）、各尺度項目得点（素点）の合計点をそれらの指標とした。社会的スキルについては、KiSS-18の因子分析を行った（主成分解、Promax回転。なお、これらについては、以下の因子分析においても同様）。因子数はKaiser-Guttman基準と

表1 社会的スキル尺度 (kiss-18) 項目の因子パターンおよび因子間相関

項目番号	質問項目	I	II	III	IV	$r^2$
12	仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか	<b>.754</b>	.172	.297	.022	.578
9	仕事をするとときに、何をどうやったらよいか決められますか	<b>.723</b>	-.088	.121	.013	.563
2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	<b>.717</b>	.043	.188	-.190	.678
18	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	<b>.662</b>	-.128	.121	.227	.533
14	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	<b>.602</b>	.263	.132	-.033	.458
3	他人を助けることを、上手にやれますか	<b>.533</b>	.193	.104	-.060	.435
8	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	.073	<b>.739</b>	.054	.101	.564
6	まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	.147	<b>.687</b>	.103	-.064	.611
4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.067	<b>.679</b>	.129	-.077	.568
11	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	.210	<b>.499</b>	.018	.326	.482
7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	<b>.437</b>	<b>.439</b>	-.068	.096	.466
5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	-.209	.214	<b>.761</b>	.152	.681
10	他人が話しているところに、気軽に参加できますか	-.091	.149	<b>.730</b>	-.006	.581
15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.151	.075	<b>.670</b>	.117	.606
13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	.336	-.368	<b>.576</b>	.050	.513
1	他人と話していて、あまり会話が途切れにくいほうですか	.065	.257	<b>.549</b>	-.363	.592
16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	.088	-.117	.055	<b>.768</b>	.614
17	まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていますか	-.100	.312	.038	<b>.693</b>	.589
	寄与率	3.342	2.708	2.579	1.482	10.112
	説明率	18.57%	15.05%	14.33%	8.24%	
	因子間相関					
		I	II	III		
	II	-.177				
	III	-.262	-.253			
	IV	.027	-.041	-.043		

注:ゴシック太字は因子負荷量の絶対値が.40以上であることを表す。

解釈可能性を考慮して4因子に指定した(表1参照)。その結果、第1因子は「仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか」、「仕事をするとときに、何をどうやったらよいか決められますか」などが高く負荷しており、「問題解決能力」と解釈した。第2因子は「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」、「周りの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか」などが高く、「感情トラブル対処」と解釈した。第3因子は「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」、「他人が話しているところに、気軽に参加できますか」などが高く、「表出的コミュニケーション能力」と解釈した。第4因子は高く負荷した項目が少なかったため、解釈は行わなかった。そこで、第1～第3因子の因子得点を社

表2 充実感尺度項目の因子パターンおよび因子間相関

項目番号	質問項目	I	II	III	r <sup>2</sup>
20	毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある	<b>.736</b>	.106	.073	.531
14	生まれてきてよかったと思う	<b>.725</b>	-.041	-.066	.489
9	私は生きがいのある生活をしている	<b>.674</b>	.186	.197	.676
4	生活に充実感で満ちた楽しさがある	<b>.658</b>	.282	.144	.705
18	自分の責任をはたすことに喜びを感じる	<b>.638</b>	<b>-.522</b>	.032	.464
2	毎日の生活に退屈している	<b>.629</b>	.342	.099	.636
1	毎日の生活にはりがある	<b>.610</b>	.253	.193	.635
8	毎日、毎日、変化のない単調な日々でつまらない	<b>.598</b>	.380	.168	.633
16	私は価値のある生活をしていると思う	<b>.422</b>	.323	.283	.516
5	私ひとりだけが取り残されているようで寂しい	.027	<b>.774</b>	.067	.621
17	自分がなさけなくいやになる	-.129	<b>.751</b>	.177	.542
11	誰も私を相手にしてくれないような気がする	.150	<b>.691</b>	.004	.569
10	自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる	.323	<b>.587</b>	-.241	.592
19	私をわかってくれる人が居ないと思う	.363	.391	-.235	.390
7	私は独立心が強いと思う	-.150	.000	<b>.811</b>	.622
6	自分の信念にもとづいて生きている	.322	-.087	<b>.615</b>	.562
13	私には毎日の生活の中でなにかの使命感がある	.316	-.213	<b>.591</b>	.532
3	私は精神的に自立していると思う	.201	.456	<b>.584</b>	.485
12	私は主体的に生きていると思う	.243	-.092	<b>.560</b>	.427
15	いざとなるとどうしても人になたまってしまう	-.068	.153	<b>.457</b>	.219
寄与説明率		4.613 23.07%	3.513 17.56%	2.720 13.60%	10.846
因子間相関					
		I	II		
	II	.338			
	III	.237	.025		

注1: 太字は因子負荷量の絶対値が.40以上であることを表す。

会的スキルの指標とした。

充実感については、充実感尺度の因子分析を行ったところ（因子数は解釈可能性を考慮し、3因子に指定）、第1因子は「毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある」、「生まれてきてよかったと思う」などが高く負荷し、「充実気分」と解釈した。第2因子は「私ひとりだけが取り残されているようでさびしい」、「自分がなさけなくいやになる」などが高く、「連帯感（のなさ）」と解釈した。第3因子は「私は独立心が強いと思う」、「自分の信念にもとづいて生きている」などが高く、「自立」と解釈した（表2参照）。そこで、同じく第1～第3因子の因子得点を充実感の指標とした。

ボランティア活動のイメージについては、それに関する質問項目の因子分

表3 ボランティア活動のイメージに関する質問項目の因子パターンおよび因子間相関

項目 番号	質問項目	I	II	III	IV	$h^2$
18	不公平な活動だと思う	<b>.749</b>	-.011	-.080	-.134	.562
17	ひま人のすることだと思う	<b>.743</b>	.026	-.143	-.139	.572
3	おせっかいな人がするものだと思う	<b>.656</b>	-.121	-.048	.042	.536
15	必要のない活動だと思う	<b>.561</b>	-.386	.017	-.116	.572
25	偽善的だと思う	<b>.550</b>	-.167	-.169	.058	.503
13	バイトとの違いがよくわからない	<b>.533</b>	-.031	.317	.267	.431
2	いったい何をしているのかわからない	<b>.508</b>	.000	-.030	.363	.515
9	社会のために役立つものだと思う	-.029	<b>.770</b>	-.134	.219	.621
10	責任感が持てると思う	.129	<b>.695</b>	.137	-.023	.474
19	勉強になると思う	-.025	<b>.660</b>	.331	-.009	.617
21	自ら進んでするものだと思う	-.138	<b>.552</b>	.173	.027	.439
5	金では得られない経験が出来ると思う	-.251	<b>.529</b>	.271	-.129	.614
23	無報酬な活動だと思う	.273	<b>.479</b>	-.463	.127	.515
4	思いやりのある人がするものだと思う	.214	<b>.436</b>	-.106	.360	.391
12	楽しい活動だと思う	.139	.237	<b>.799</b>	-.021	.678
24	やりがいのあるものだと思う	-.056	<b>.437</b>	<b>.612</b>	.013	.671
1	一度は参加してみたいと思う	-.197	.249	<b>.502</b>	.038	.467
11	専門的な能力が必要だと思う	.391	-.025	<b>.482</b>	.392	.476
16	ボランティアをするならバイトをする方がよい	.238	.085	<b>-.603</b>	.137	.549
22	難しいものだと思う	-.169	-.129	.068	<b>.752</b>	.502
6	気軽に出来ないと思う	-.038	.050	-.332	<b>.628</b>	.541
14	恥ずかしくて出来ないと思う	-.012	-.343	.094	<b>.586</b>	.416
8	参加する方法がわからない	.169	.173	-.074	<b>.577</b>	.466
20	ボランティアといってもよくわからない	.326	.142	-.198	<b>.410</b>	.446
7	困った人を助けるものだと思う	-.278	.266	-.172	.339	.267
	寄与	3.773	3.519	2.884	2.668	12.843
	説明率	15.09%	14.08%	11.53%	10.67%	51.37%
	因子間相関					
		I	II	III		
		II	-.315			
		III	.296	.128		
		IV	.311	.062	-.129	

註:ゴシック太字は因子負荷量の絶対値が.40以上であることを表す。

析を行ったところ（因子数は解釈可能性を考慮し、4因子に指定）、第1因子は「不公平な活動だと思う」、「ひま人のすることだと思う」などが高く負荷しており、「批判的イメージ」と解釈した。第2因子は「社会のために役立つものだと思う」、「責任感がもてると思う」などが高く、「肯定的イメージ」と解釈した。第3因子は「楽しい活動だと思う」、「やりがいのあるものだと思う」などが高く、「期待感」と解釈した。第4因子は「難しいものだと思う」、「気軽に出来ないと思う」などが高く、「躊躇」と解釈した（表3参照）。そこで、同じく第1～第4因子の因子得点をボランティア活動へのイメージの指標とした。

ボランティアで得られることに関する質問項目については、経験のある者

表4 各ボランティア活動経験群におけるパーソナリティおよび社会的スキル得点について

	経験あり群	経験希望群	経験なし群
社会的外向性	32.39 a (7.33)/70	32.12 a (7.49)/34	27.69 b (7.00)/45
支配性	29.74 a (5.90)/72	27.58 ab (6.25)/33	25.56 b (5.04)/45
問題解決能力	.13 a (.99)/71	-.01 a (.81)/33	-.20 a (1.12)/45
感情トラブル対処	.04 a (1.02)/71	.14 a (.80)/33	-0.17 a (1.10)/45
コミュニケーション能力	.10 a (.95)/71	.33 a (1.08)/33	-.40 b (.91)/45

註1 上段:平均値、下段:(SD)/N

註2:各尺度・因子の平均値の右横の記号(アルファベット)について、同じアルファベットが付してあるもの間には有意な差はないことを表す。

となない者として尋ね方が異なるので、因子分析は行わず、各項目得点をそのまま指標とした。

**ボランティア活動経験とパーソナリティ・スキルとの関係について** ボランティア活動経験の有無によって、社会的外向性や支配性、社会的スキルにどのような違いがみられるかを調べるために、ボランティア経験の有無にもとづいて分類した3つの群（経験あり群、経験希望群、経験なし群）ごとに平均値とSDを算出し、1要因の分散分析を行ったところ、社会的外向性、支配性、表出的コミュニケーション能力において有意な差が認められた（各、 $F(2, 146) = 6.33, p < .01$ ;  $F(2, 147) = 7.47, p < .001$ ;  $F(2, 146) = 6.12, p < .01$ ）。そこで、下位検定（*Newman-Keuls* 検定による。以下同様）を行ったところ、経験あり群は経験なし群よりも、社会的外向性、支配性、表出的コミュニケーション能力が有意に高く、さらに社会的外向性と表出的コミュニケーション能力については、経験希望群も経験なし群より有意に高いという結果が得られた（表4参照）。

**充実感との関係について** 次に充実感についても、先と同様に平均値とSDを求め、1要因の分散分析を行った。その結果、充実気分のみ有意な差が認

表5 各ボランティア経験群における充実感得点について

	経験あり群	経験希望群	経験なし群
充実気分	.17 a (1.03)/71	.22 a (.88)/33	-.43 b (.92)/45
連帯感	.05 a (.92)/71	-.03 a (1.09)/33	-.06 a (1.08)/45
自立	.04 a (.89)/71	-.11 a (1.00)/33	.02 a (.98)/45

註1 上段:平均値、下段:(SD)/N

註2:各因子の平均値の右横の記号(アルファベット)について、同じアルファベットが付してあるもの間には有意な差はないことを表す。

められた ( $F(2, 146) = 6.44, p < .01$ ) ので、下位検定を行ったところ、経験希望群や経験あり群の方が、経験なし群よりも充実気分が有意に高いことが示された(表5参照)。

**ボランティア活動イメージとの関係について** 同様に、ボランティア活動のイメージについても、平均値とSDを求め、1要因の分散分析を行った。その結果、全てのイメージで有意な差が認められた(批判的イメージ  $F(2, 143) = 6.66, p < .01$ ; 肯定的イメージ  $F(2, 143) = 10.65, p < .001$ ; 期待感  $F(2, 143) = 4.65, p < .05$ ; 躊躇  $F(2, 143) = 8.42, p < .001$ ) ので、下位検定を行ったところ、批判的イメージは経験なし群が他よりも有意に高く、肯定的イメージは、経験希望群 > 経験あり群 > 経験なし群の順でそれぞれの間有意な差がみられ、期待感も経験なし群が他よりも有意に低く、躊躇は逆に経験あり群の方が他よりも有意に低いことが示された(表6参照)。

ボランティア活動で得られることとの関係について ボランティア活動で得られることについても同様の分析を行ったところ、「地域のために役立った」、「困っている人のために役に立った」、「生活に充実感ができた」、「友人や知人を得ることができた」、「社会の課題に対する理解が深まった」については有意な差が認められた(各、 $F(2, 145) = 4.62, p < .05$ ;  $F(2, 145)$ )

表6 各ボランティア経験群におけるボランティアへのイメージについて

	経験あり群	経験希望群	経験なし群
批判的イメージ	-.19 b (.89)/69	-.18 b (.95)/34	.45 a (1.07)/43
肯定的イメージ	.04 b (1.03)/69	.52 a (.95)/34	-.47 c (1.00)/43
期待感	.15 a (1.14)/69	.19 a (.74)/34	-.38 b (.84)/43
躊躇	-.34 b (.94)/69	.31 a (.82)/34	.31 a (1.06)/43

註1 上段: 平均値、下段: (SD)/N

註2: 各因子の平均値の右横の記号(アルファベット)について、同じアルファベットが付してあるもの間には有意な差はないことを表す。

表7 各ボランティア経験群におけるボランティアで得られることについて

	経験あり群	経験希望群	経験なし群
地域のために役に立った	3.93 a (.85)/71	4.12 a (.78)/33	3.52 b (1.07)/44
困っている人のために役に立った	3.92 ab (.92)/71	4.27 a (.72)/33	3.64 b (1.06)/44
人間性が豊かになった	3.62 a (.98)/71	3.82 a (.85)/33	3.41 a (1.09)/44
思いやりの心が深まった	3.70 a (1.03)/71	3.79 a (.93)/33	3.34 a (1.08)/44
生活に充実感ができた	3.37 ab (1.10)/71	3.64 a (.90)/33	3.02 b (1.00)/44
友人や知人を得ることができた	3.27 ab (1.22)/71	3.88 a (.82)/33	3.52 b (1.00)/44
知識や技能が身に付いた	3.25 a (1.18)/71	3.36 a (.93)/33	3.32 a (1.05)/44
ものの見方、考え方が広がった	3.72 a (1.08)/71	4.00 a (.83)/33	3.60 a (1.00)/43
学校・職場で評価された	3.10 a (1.23)/71	3.12 a (.93)/33	3.30 a (1.02)/44
報酬があった	2.10 a (1.07)/71	2.33 a (1.11)/33	2.55 a (.90)/44
社会の課題に対する理解が深まった	3.34 b (1.05)/71	3.94 a (.70)/33	3.07 b (1.07)/44

註1 上段: 平均値、下段: (SD)/N

註2: 各項目の平均値の右横の記号(アルファベット)について、同じアルファベットが付してあるもの間には有意な差はないことを表す。

表8 参加したことがある（参加するとしたらする）ボランティア活動と各群の経験率・希望率（度数およびパーセンテージ）

	経験あり群 (経験率)	経験希望群 (希望率)	経験なし群 (希望率)
子供たちを対象とした活動 (例:スポーツ、レクリエーションなどの指導など)	20 (27.8%)	18 (52.9%)	14 (31.1%)
お年寄りや障害を持つ人の援助活動 (例:訪問による介護や通院の付き添いなど)	29 (40.3%)	9 (26.5%)	1 (2.2%)
病気の人の手助けや健康を守る活動 (例:リハビリの手助けや話し相手、カウンセリング)	1 (1.4%)	6 (17.6%)	3 (6.7%)
日本にいる外国人の世話や援助活動 (例:被災地への物資援助や募金活動など)	5 (6.9%)	6 (17.6%)	4 (8.9%)
自然や環境を守る活動 (例:リサイクル活動、道路・公園の清掃など)	50 (69.4%)	25 (73.5%)	16 (35.6%)
地域づくりの活動 (例:自治会の手伝い、消防・防犯・交通安全などの活動など)	21 (29.2%)	10 (29.4%)	2 (4.4%)
自分の知識を生かした活動 (例:習い事の指導や法律相談、講師ボランティアなど)	3 (4.2%)	15 (44.1%)	14 (31.1%)
その他	3 (4.2%)	0 (0.00%)	2 (4.4%)

=4.46,  $p < .05$ ;  $F(2, 145) = 3.48$ ,  $p < .05$ ;  $F(2, 145) = 3.67$ ,  $p < .05$ ;  $F(2, 145) = 7.48$ ,  $p < .001$ ) ので、下位検定を行ったところ、すべてにおいて、経験希望群が経験なし群より有意に高く、また「地域のために役に立った」は、経験あり群もなし群より有意に高く、「社会の課題に対する理解が深まった」は、経験希望群と経験あり群の間にも有意な差がみられた（表7参照）。

**経験の有無とボランティア活動内容について** 参加したことがある（または、参加するならする）ボランティア活動を尋ねた問について、群ごとに各活動の経験率（希望率）を算出した。その結果を表8に示す。表より、経験あり群では「お年寄りや障害を持つ人の援助活動」や「自然や環境を守る活動」の経験率が高いのに対し、経験希望群や経験なし群では「子供たちを対象とした活動」、「自然や環境を守る活動」、「自分の知識を活かした活動」の希望率が高かった。また、経験あり群で比較的高かった「お年寄りや障害を持つ人の援助活動」への希望率は低い傾向にあり、経験希望群・なし群で高かった「自分の知識を活かした活動」は、経験あり群の経験率が非常に低いとい

う特徴がみられた（表8参照）。

## 考 察

社会的外向性や支配性、表出的コミュニケーション能力、充実気分については、経験あり群が経験なし群よりも有意に高いという結果が得られ、なおかつ、経験あり群と経験希望群の間には有意な差はなく、逆に支配性以外では経験希望群と経験なし群の間にも有意な差がみられた。このことから、積極的なパーソナリティ傾向や表出的なコミュニケーション能力あるいは日々の充実感、ボランティア活動を通じて獲得されたというよりは、ボランティア活動に関心が高い者ほど外向的でリーダーシップを発揮し、他者と積極的に関わっていく傾向も強く、日々の充実感もより強く感じていると考えた方が自然であろう。もちろん、今回の結果だけでは、ボランティア活動に関心のない者に活動に参加させて、積極性や表出的コミュニケーション能力、充実感が高まる可能性は否定できないが、後述するように、ボランティア活動へのモチベーションを高める工夫は必要であろう。

次に、ボランティア活動に対するイメージについては、まず、経験なし群の方は他の群よりも批判的イメージが高く、期待感が低いという結果は、彼らがボランティア活動をしてみたいと思わないことからみて当然のことであろう。また、経験あり群の方が躊躇が低い点も、彼らが既に経験をしていてある程度要領が分かっていると考えられるので、当然の結果といえよう。しかし、肯定的イメージは経験あり群よりも経験希望群の方が高かったことは、注目すべき点であろう。このことは、ボランティア活動で得られることにおいて、経験希望群と経験あり群との間に有意な差はほとんどみられず、差がみられた場合には、経験希望群の方が有意に高いという結果になっていることと併せて考えると、経験希望群はボランティア活動に対して、非常によいイメージを持ちやすいと言えるであろう。実際に経験した者は、ある程度ボランティア活動の実情を知っているため、幾分冷静にボランティア活動を見つめることができるのであろうが、活動希望群はボランティア活動に理想的

な姿を求めやすい恐れがあると考えられる。また、参加するならする活動について、「自分の知識を活かした活動」が比較的高く、「お年寄りや障害者を持つ人の援助活動」が比較的低い点も、ボランティア活動への偏った希望が現れていると考えることができよう。経験あり群において、「自分の知識を活かした活動」を行った者がほんのわずかであり、逆に「お年寄りや障害者を持つ人の援助活動」の経験率が高いことから類推すると、おそらく、「自分の知識を活かした活動」にそれほど需要がなく、むしろ「お年寄りや障害者を持つ人の援助活動」の方が実際に求められやすい活動なのであろう。そのように考えると、経験希望群の思い描いているボランティア活動は現実のものとかかなり乖離している可能性が高いと思われる。もしそうであるなら、経験希望群が実際にボランティア活動に接する際に、理想と現実のギャップを感じてしまい、却ってボランティア活動にマイナスイメージを抱かせることにもなりかねない。ボランティア活動に関心を持つ者に対して、安易にボランティア活動を奨励するのではなく、ボランティア活動の現状を認知させつつ、活動参加へのモチベーションを高めていく工夫をしていくことが重要であるといえよう。

ところで、高畑（2007）は、東京都が全国に先駆けて今年度より高校の必修科目に導入した「奉仕」の授業（必修1単位、年間35時限）について、都立広尾高校におけるゴミ拾いや落書き消しのボランティア活動実践を報告しているが、その取り組みは、学校現場でのボランティア活動の導入に大きな示唆を与えるといえよう。同校は生徒に対して単にボランティア活動を行わせるのではなく、NPO 団体に協力を求め、学年集会の場を設けて「なぜボランティアが必要なのか」を講義してもらったところ、初めは興味がなさそうだった生徒も、次第に関心を示すようになり、期待以上の効果が上げることができたようである。このように、ボランティア活動の意義を理解させるための十分な準備をすることは、重要なポイントであるといえよう。

最後に、今回の調査では、経験あり群の実情—たとえば、彼らは自ら進んでの参加したのかそれとも半強制的であったのか、参加回数や参加実績など

はどうか、などを十分に把握できていないという問題点が残っている。今後はこのような点も考慮した上で、さらなる検討が求められよう。

### 引用文献

- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. (1980). *Skillstreaming the Adolescent: A Structured Learning Approach to Teaching Prosocial Skills*. Research Press.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 教育ルネサンス—奉仕とボランティア (1): 部活ごと地域活動 (2007). 読売新聞 (4月17日朝刊)
- 村上徹也 (2002). 活動状況と課題 大学とボランティア 雨宮孝子・小谷直道・和田敏明 (編著) 福祉キーワードシリーズ ボランティア・NPO 中央法規出版 pp. 90-91.
- 日本経済団体連合会 (2007). 希望の国, 日本ビジョン2007 日本経団連出版
- 西平直喜 (1979). 青年期における発達の特徴と教育 大田 堯ほか (編) 子供の発達と教育6 岩波書店 pp. 1-56.
- 大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究—現代青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, **32**, 100-109.
- 総務庁青少年対策本部 (編) (1994). 青少年とボランティア活動「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書 大蔵省印刷局
- 総務省統計局 (2003). 社会生活基本調査トピックス 増加するボランティア人口 総務省統計局 2003年1月16日  
<<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/topics/tps0301.htm>> (2007年7月24日)
- 高木 修・玉木和歌子 (1995). 阪神・淡路大震災におけるボランティア—避難所で活躍したボランティアの特徴— 関西大学社会学部紀要, **27**, 29-60.

高木 修・玉木和歌子 (1996). 阪神・淡路大震災におけるボランティア  
—災害ボランティアの活動とその経験の影響— 関西大学社会学部紀要,  
28, 1-62.

高畑昭男 (2007). やばいぞ, 日本 第4部 忘れてしまったもの10 「自  
分たちがきれいにした」 産経新聞 (11月16日朝刊)

辻岡美延 (1982). 新性格検査法 日本心理テスト研究所

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター (編) (2006).  
2005年ボランティア活動年報 社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国  
ボランティア活動振興センター